



広安里

発行 釜山日本人学校

釜山広域市水営区民楽洞 173-8

TEL 051-753-4166

FAX 051-756-4851

<http://user.chollian.net/~pusjpnsc>平成
18年度
第9号

「幼い日の追憶」

学校運営委員長

大道英隆

このたび由緒ある釜山日本人学校の運営委員長に就任させていただきました。教育には思いやりと愛が必要です。子供の心に栄養を与えるのが教育です。未来人の子供たちが、将来の種まきをしていけるように、生きていくための基礎的能力について学校や家庭から学べるための環境を作っていくのが教育です。子供たちがこの舞台から心の栄養素をたくさん吸収して心のエンジンの性能を高めていってほしいと切に願っております。

微力ではございますが、釜山日本人会、釜山日本人学校、釜山総領事館と十分に連携しながら、明るく和やかで、子供のために積極的に行動する運営委員会として活動をしていきたいと存じますので、ご支援のほどよろしくお願いたします。

さて、下記エッセイは祖父の死を通じ、ある死者とのテレパシーにより感じた幼い日の追憶を綴ったものです。命とははかないものですが、天から授かった命を精一杯に生きた証として軍服姿の写真のその微笑は幼い私に何を訴えかけたかたののでしょうか。

その写真をきっかけに、幼いころからおぼろげながら生死の意味を考えてきたように思いません。それ以来、生死が彷徨う人間世界で、曲がりなりにも健気に生きる、気丈に生きる、そしてやさしく、あたたかな思いやりを持つということが人間にとって一番重要なことのように思えるようになってきました。

それはずっと昔の幼い追憶。これがどういうわけかときどき心の奥底から顔を出す。田舎のわが家は古いお寺。9人兄弟の子沢山でもう打ち止めしたい7番目に生まれた私。怪しい靈気が漂うわが家は山門のすぐ横にあった。父母、祖父母、兄弟姉妹の顔がつつぎと鮮明に浮かび上がってくる。この寺という空間でお互いが持たれ合って生きてきたのだ。私の少年時代は線香のにおいと墓の不気味さになんともいえぬ違和感を抱いていた時期であった。

母方の祖父は市議会の偉いさんだったが、年をとってからは天国に行くのだとお寺の寺務の手伝いをしていた。遊びに行くときご機嫌でいつも酒のにおいがしていた。ある日、酒を飲んだあと大好きな風呂に入り、意識を失いかけた。救急車が来て入院したが翌々日帰らぬ人になった。あつという間に逝ってしまった。はかなさを感じた。はじめて身近な人の死に直面した。亡骸の皮膚の色は黄色だった。死ぬと皮膚が黄色になる。このことがいつも頭に擡がっていた。お寺は不幸な出来事が集まる場所でみんなが不幸を感じて泣くところだ。そしてその声がいつもわたしの小さな心の奥に響いていた。仏の教えには生、老、病、死の4大宿命があるというけれど、死はその終着

駅。そのためわが家に言い知れない暗い雰囲気がいつも漂っていた。死なんて考えられない。考えるだけで恐ろしい。私は習わぬ経を心のなかで唱えることがしばしばあった。それは経を唱えれば、死が遠ざかると考えていたから。怖いことが起こりそうなときや人の不幸を見たときに無意識のうちに経を唱えていた。

小坊主たちにとってお寺は格好の遊び場だった。死人、坊主、遺族と配役を決めて、見よう見まねで葬式をして遊んでいた。私は死人役で、たまたま予備で取ってあった棺桶に入った。どうしたわけかそこで寝込んでしまった。私ひとりが骨堂の棺桶に数時間いたのだった。夕方になってみんな帰ってしまった。異様な静けさといつもながらの線香のにおい。あの世かなと一瞬錯覚してしまうほどだった。周りを見渡すと軍服姿の写真が目飛び込んできた。微笑んでいる。無意識に写真の近くにいてよくよく眺めはしたが、恐怖感が先にたち経を唱えた。骨壺の中からカサカサと音がした。喜んでくれたのかな。このとき私ははじめて死者に親しみを覚えた瞬間だった。死と向き合うとはこのことをいうのかと感じた幼い自分がそこにいた。

(終)